1　資本主義と無痛奔流

無痛奔流が、私の中を通り過ぎる。私を貫いた無痛奔流は、私の両手と両足を伝って、さざ波のように拡散する。それは、幾重にも分岐しながら、私を遠巻きにして取り囲み、ふたたび私へと侵入する機会を狙っている。無痛奔流が出入りするときに感じる、この、冷たく、暗い、親密な感覚。私へと流れ込んだものが私を作り上げ、私から流れ出たものがふたたび私に戻ってくる。皮膚の表面を、骨の内部を、見えることのない連結管を満たしながら、そのうねりは再帰的に自分自身へと貫通する。そのようなひとつらなりの流れの線が、私を中心として四方八方に伸びてゆく。それは限りなく遠い地平にまで及び、私からは見えないその彼方にまで延々と拡大していることが予感される。

無痛奔流と戦うとは、どういうことなのか。それは私の外部にあるものと戦うことであり、同時に、私の内部にあるものと戦うことである。次々と流れ込み、次々と流れ出すものとの戦い。私の内と外に戦略的に展開し、お互いに連絡を取り合いながら私を眠らせようとする無痛奔流に対して、いったいどのような戦いを挑めばよいのだろうか。私の内部に侵入した無痛奔流と戦うところの私は、ほんとうに無痛奔流に浸食されていないのか。無痛奔

流によって浸食されない領域を、私は自分自身から区切り取ることができるのだろうか。果てしなく分岐しながら、自分が通り過ぎる領域を眠らせ、マヒさせ、湿気で覆い、自縄自縛させ、ミルクを与え、抵抗の意志を奪い、これでよいと思わせ、笑顔を付与し、そうやって人々を生きたまま化石化する無痛奔流のうねりと、どのようにして戦えばよいのだろうか。

私が無痛奔流と戦うとき、私は相手の勢力を減じることができず、逆にそれを勢いづかせてしまうかもしれない。相手は、私が戦おうとする意気込みをうまく利用し、みずからの延命に役立てようとするかもしれない。私が戦おうとしている相手は、私の力を利用して何度も何度も地の底から立ち直ってくるかもしれない。なぜなら、私が戦おうとしている相手は、この私自身を貫いて流れるのであり、この私自身が戦いによって活性化すればするほど、私を貫いて流れるものもまた活性化するはずだからである。その謎を解かなくてはならない。私自身へと流れ込み、私自身から流れ出るものと戦うとは、いったい何をすることなのかを、解明しなくてはならない。

われわれは、資本主義の社会に住んでいる。現代の資本主義とは、モノやお金がもっとほしいというわれわれの欲望を原動力として、新しい商品を次々と生み出し、市場をとおしてそれらを次

々と購入し消費させることによって、果てしなく自己増殖運動を続けてゆく経済システムのことである。資本主義の運動によって生み出された利潤は、さらなる利益を求めて再投資される。

この自己増殖運動は、単に市場経済システムだけにとどまらず、われわれの現代社会全体の原理になっているのだと多くの思想家たちは考えてきた。現状に満足して歩みを止めるのではなく、つねに現状を否定しながら、全力で自己拡大し、前進してゆく現代社会。大澤真幸は、この「資本」という概念が、われわれの社会の「民主主義」「人権」「自然科学的真理」などを隠喩的に代表していると述べる（大澤真幸『文明の内なる衝突』ＮＨＫブックス　二〇〇二年　一〇九頁）。この意味で、資本主義とは、市場経済システムを道具として使いながら、あらゆる場面で自己増殖を図ろうとする現代社会の運動の象徴のことであると言ってもよい。

資本主義と比較することによって、無痛文明の特徴が、さらにいっそう明らかになってくるはずだ。

（書籍版に続く・・・）